高須賀　義博

## 『マルクスの競争・恐慌観』

(一橋大学経済研究叢書 34)

岩波書店　1985.3　ix＋277 ページ

マルクス経済学の発展をむしばむ2つの科学観は，相対主義と教条主義である。相対主義とは，認識の客観性への明示的なまたは暗然たる不信感であって，これは，イデオロギーや数の力，組織の力をたのみとする。教条主義とは，「マルクスは正しい，命題 A はマルクスが述べている，だから命題 A は正しい」という思考パタンである。この相対主義と教条主義の科学観は，一見，対立する科学観のごとくである。しかし，両者は時として結びついているように，両方とも，本当の意味での科学性の基準をもちあわせていない点で同じである。現在のマルクス経済学の課題は，私見では，この2つを打破することにある。そのためには，マルクス経済学の科学性の基準を確定し，その論証性と実証性(帰納・検証・反証をふくむ)に真剣な考慮を払う必要があろう。

高須賀義博教授のマルクス経済学研究は，非宇野派系経済学のなかでは，この点で高く評価することができる。本書で教授は，マルクスの理論形成史を研究し，『資本論』は平均状態を仮定する構造論(長期構造論)である，平均状態達成の機構は産業循環論として『資本論』のそとに残されている，と結論する。そして，構造論は本質論であり，循環論＝競争論は現象論であるとする。なぜ，これが非宇野派系のなかで高い評価に値するかといえば，『資本論』の未完性を大胆に承認している(276 ページ)からであり，観察可能な現象との結びつきを欠く本質論は科学でないと考えている(274 ページ)からであり，さらに『資本論』イコール経済原論ではなく，経済原論は構造論と循環論からなるとして(137 ページ)，解釈と自説を区別しているからである。教授の立論が，相対主義や教条主義から自由であること，マルクス経済学における科学性の基準につき真摯に考慮していることの証左であろう。

『資本論』が長期構造論だというのは，産業循環を通してみた平均状態での構造論だということであり，これには構造の長期動態論も含まれるが(176 ページ)，『資本論』のそのような把握は，マルクスの例の「理想的平均」への論及を大きなよりどころとしている。同時に，第1に，『資本論』は方法的には「資本一般」だという形成史の理解，第2に，『資本論』の競争導入(とくに競争転化論)は「ミスリーディング」だという判断，第3に，『資本論』に散見される循環への論及は産業循環論を示すものではないという理解，に負っている。実は，『資本論』が「理想的平均」状態における資本主義の内的構造論であるという結論は，この3点の成否には必ずしも依存しないのであるが，教授はこの3点を本書の3つの章のそれぞれにおいて挙証しようとされる。

1)『資本論』は方法的には「資本一般」であるといえるかどうか。この解釈は，『資本論』はカバレジとしては「資本一般」ではないという解釈，さらにいえば，カバレジとメソッドはずれたという解釈を意味する。これがおおすじで佐藤金三郎教授らの説と一致するものであることは言をまたないであろう。『要綱』の「資本一般」と「競争」の区別は，教授もいわれる通り，資本の本質を資本相互の関係と分離しこれに先だって扱おうとする考えである。そこでは，「資本一般」の対象と方法は分れていなかった。そして，『資本論』では，教授もみとめられている通り，明示的に資本相互の関係が扱われるようになった。その経緯を教授は，資本相互の関係がはいりつつあった 1861–63 年に，「資本一般」の方法は等価交換の仮定に「純化」され，その時点で対象と方法の分離が生じ，方法的にはこの「純化」の延長上に『資本論』の「理想的平均」視点もはいってきた，と説明されている。

この立論の成否は，61–63 年の時点でマルクスが等価交換を「資本一般」の想定と同視していることを根拠に，等価交換を「資本一般」の方法の「純化」とみなせるかどうかということに懸るが，普通に考えれば，諸資本の関係の資本関係にとっての中立化の方式として等価交換の仮定を明示しているのだから，これは諸資本の関係の1つの処理方式であって，『資本一般』の方法の後退，純・不純でいえば「不純化」になるという評価の方が説得的であろう。さらに，「資本論」になると，転化論・生産価格論が確立し，諸資本の関係は等価交換の関係をこえる。となれば，教授の基準からいっても，純化傾向の逆転が生じている。『資本論』では，「資本一般」の方法はさらに後退しているのである。「資本一般」の方法の後退——これは私見では，資本を主体とする内的編成論の充実に対応する——の帰結として，『資本論』は資本主義の内的構造の理想的平均における分析をめざすものになっている。そのようなわけで，『資本論』の「理想的平均」分析＝方法的「資本一般」の立場(38，44–6 ペ－

ジ)という説は，全面的な支持をえるのがむづかしいように思われる。

また，教授の，生産価格は「価値からずれた価値」(58ページ)，つづめていえば，価格は価値であるという理解も，『資本論』＝方法的「資本一般」，という説の一翼を担っている。そして，この生産価格理解は，生産価格には所与の一般的利潤率が必要であり(126ページ)，それは価値利潤率から与えられる(『マルクス経済学研究』131-40ページ)という考えと絡んでいるように解せる。しかし，いわゆる価格方程式では一般的利潤率と諸生産価格は，価値方程式とは別個に，同時に決定され，剰余価値率＞0⇄一般的利潤率＞0という関係があるのではなかったろうか。

2) 『資本論』の競争の導入の仕方は「ミスリーディング」(253ページ)だったといえるかどうか。教授の趣旨はこうである。マルクスは，「法則の執行者としての競争」と「平均化機構としての競争」という2つの競争観をもっていた。『資本論』に前者は競争転化論として導入された。しかし競争転化論は誤っているだけでなく市場生産価格の概念によって止揚されている。価値は生産価格の背後の規制者になっている。競争は「平均化機構」に「純化」され，産業循環と同じになっている(126-7ページ)。教授にとって，諸資本の関係・競争の『資本論』への導入は明らかだが，構造を「構成する」諸資本の関係と価値の生産価格への転化をもたらす競争とが導入されたのであって，構造を「形成する」諸資本や「現実的競争」が導入されたのではない。その意味で競争の導入の仕方は misleading なのであった。

たしかに競争転化論は重大な欠点をもっている。それは教授によって見事に論じられている(108-110ページ)通りである。問題は，しかし，競争転化論が誤謬だからといって，生産価格論・市場価値論への競争の導入自体を切りすて，競争論を循環論にしぼっていいのだろうか，ということである。『資本論』では，競争導入のおかげで生産価格・市場価値にとっての市場機構の役割が明確になった。生産価格は，剰余価値の配分がえをともなう市場均衡価格であり，市場価値も市場調整的な供給者が決定することが，不十分ながら明らかになった。この点は，競争転化論を離れても評価できるのではないか。生産価格や市場価値などにとっての競争と市場のこの基礎的役割を前提してはじめて，産業循環が市場均衡達成の動態的メカニズムであり，競争の現実的機構であることも示せるのではないか。となると，競争導入の仕方に misleading なところはあるにしても，導入の意義は大きい，という見方もできるのではなかろうか。

3) 『資本論』の産業循環への言及をどう位置づけたらよいか。教授は，これらの言及は産業循環論そのものではない，それは方法的な立場からいって説かれないことになっているとし，『資本論』の循環への主要な言及をとりあげて，それがどういう意味をもつかを説明されている。例えば，資本の絶対的過剰論は資本主義の構造論のなかで産業循環をひきおこす矛盾を指摘したものとされ(206ページ)，利子率の循環的変動論はマルクスの意図とエンゲルスの編集の不一致を示すものと示唆されている(223ページ)。

『資本論』に局面交替の因果関係を総合的に論じる産業循環論は存在しないという教授の結論は大多数の支持をえることができよう。循環論はのちに予定していることを明言している個所もある。しかし，『資本論』になぜ産業循環論はないのか。教授は，『資本論』が方法的「資本一般」の立場にたつ「理想的平均」分析だからといわれる。これに対し，「理想的平均」分析の方法では「資本一般」の解体が不十分だから，という理解もありうるということを指摘しておこう。その理解では「平均」の意味は「循環をならした」という意味に限定されてはいないと解されている。

本書によって総括的に考えさせられるのは，マルクス経済学における本質と現象の扱いについてである。マルクス経済学には，本質と現象をきり離し，本質を尊重する本質主義 essentialism の傾向があった。しかし，観察可能な現象とのつながりなしで本質を論じるのは形而上学であり，同じく形而上学的拒否に対し抗するすべがないというのも事実である。そこへいくと，高須賀教授は，『資本論』＝構造論＝本質論，循環論＝競争論＝現象論，という本質と現象の二分法をとられながら(273ページ)，現象⇄本質のつながりの重要性を自覚されている。それにしても，『資本論』＝本質論と解することは，『資本論』を実証的真理性と無関係な論証的真理性の世界，信心の世界にとじこめる危険がある。そこで『資本論』の経験科学の世界への救出のために，教授には現象論との架橋を急いで頂かねばならない。道が遠い時のためにわれわれの見解を示しておくのも無駄ではないかもしれない。それは，本質と現象，資本と競争は相即不離だということである。

〔馬渡尚憲〕